自分を信じぬく力とは何か？

絶対にあきらめない不撓不屈の精神力

我が思い出の一枚

社団法人日本空手協会
本部指導員
泉屋誠三

泉屋誠三の空手半生は、私たちが抱く「空手のエリート」という協会指導員のイメージとはかけ離れたものである。泉屋は決してエリートではない。しかし彼には、踏まれても、踏みにじられても、自分の決めた道を貫き通す強靭な精神力があった。幾多の困難を克服し、泉屋を全日本チャンピオンにまで押し上げた精神力とはどういうものなのであろうか？それは自分を信じぬく力である。

協会指導員を目指して

「空手で泣いたことは、ありますよ（笑）」

泉屋誠三は照れくさそうに当時を振り返る。

「大学の空手道部の春合宿に初めて参加したときのことです。練習のあまりの厳しさに、三日目には稽古についていけなくなって、先生に『下がれ』と言われてしまいました。稽古からつまはじきにされたことが、悔しくて悔しくて、一人道場の隅でポロポロ涙をこぼして泣いていました」

日本空手協会の指導員になり、全日本チャンピオンにまで登りつめた泉屋だが、若き日の彼にはまだ王者の面影はない。そこには道に迷い、もがき苦しみながら、それでも自分を信じぬこうと苦闘する泉屋の姿があった。

小学校時代、泉屋につけられたあだ名は「デブミヤデブゾウ」。彼は意外にも肥満児だったのだ。しかも、「球技もダメ、水泳もダメ」の運動音痴。当時の泉屋は典型的ないじめられっ子だったという。そんな泉屋が空手に出会ったのは中学生の頃。タイガーマスクとブルース・リーに憧れて協会の札幌支部の門を叩いた。

「あの頃、道場には生徒が200人近くいましたが、稽古が厳しくてどんどん辞めていきました。それでも私が空手を続けられたのは、辞めたくても辞められなかったからです。入門する前に、空手をはじめる動機を聞かれた時、稽古があまりにも厳しそうなので『小児ぜんそくだから体を強くしたい』と嘘をつきました（笑）。ですから、稽古を休むと先生が心配してハガキを送って来るんです。そこには『初心忘るべからず』と書いてありました」

やがて、泉屋は「好きで好きでしょうがない」ほど空手の魅力にとりつかれてしまう。すると、いつしか太っていた体も引き締まり、中学ではスポーツでも学業でも優秀な成績を修め、ついには生徒会長を務めるほどに活発になっていた。そして中学3年の時に、当時の協会指導員粕谷均氏が行った五人掛けを見ると、その華麗な技に魅了された泉屋少年は早々と自分の人生を決めてしまう。「自分も協会の指導員になるんだ」と。

■右：小さい頃から、モノ作りに長けていた泉屋氏。現在も書道や絵画、そして彫り物など多彩な趣味を持っている。

■上：幼い頃の一枚（写真下）。現在の面影はない（？）、かわいらしい笑顔である。

夢に向かって

天真爛漫だった中学時代とは一転して、高校時代は、不良の道を突き進む。リーゼントをビシッとキメて喧嘩三昧の日々。しかし、この時代は現在の泉屋を形成した重要な時期でもあった。

「高校時代はグレていましたが、夢を持った友人たちに囲まれていました。ある者はダンサーになると言って本当にダンサーになりましたし、バイクが好きな奴はバイク屋になりました。そのまま悪の道に進んだ奴もいます（笑）。そんな彼らと将来を語りあう中で、自分の夢も明確なものになっていきました」

グレても道場にだけは通い続け、協会の指導員になるための修行を積んでいった泉屋。稽古日誌をつけはじめたのも高校時代からである。この時期のページには、「これではダメだ」「まだまだ足りない」というような記述が並んでいるという。そこには夢と現実の自分と

■生徒会長などを務めるなど大活躍であった中学生時代。

■駒澤大学空手道部時代の一枚。右から2番目が泉屋氏。

●プロフィール

泉屋　誠三（いずみや・せいぞう）

1961年10月12日、北海道出身。駒澤大学空手道部を経て、社団法人日本空手協会へ。第40回全日本空手道選手権大会では、形優勝・組手準優勝で10年ぶりの優勝を果たす。現在は、三軒茶屋道場を中心に後進の指導に当たっている。今年開催される第9回松濤杯世界空手道選手権大会のコーチを務めることも決定している。

のギャップを埋めるために、自問自答を繰り返す泉屋の姿があった。そして、大学空手界屈指の名門、駒澤大学にスポーツ推薦で入学。しかし、大学空手道部で北海道の田舎から上京した泉屋は、カルチャーショックを受けることになる。

「稽古の厳しさはもちろんですが、何よりも上級生の強さに圧倒されました。2年生相手でも五本組手がまともに受けられないほどでした。とくに覚えているのはS先輩のことです。私生活はめちゃくちゃなんですが、空手はめっぽう強いという人でした。同じ人種とは思えないくらいのインパクトがありましたね。一言で言えばケダモノです(笑)。この人のようにならなければチャンピオンにはなれないし、協会にも入れないと思いました。そして、『俺もケダモノになるんだ』と決心しました(笑)」

空手道部の猛者たちの中でもまれて逞しくなった泉屋は4年生になって初めて関東選手権でベスト8に入る。しかし、それは泉屋の空手がいよいよ花を咲かし、協会入りが現実に迫った矢先のことだった。泉屋は母親の死去に遭ってしまう。

「亡くなった日のことです。母が息も絶え絶えに『どうしても空手の道に進むのか?』と聞いてきました。そこで『自分で決めたことだから進みます』と答えると、母は『ハァ…』とため息をついて『今からでも遅くないから転身してくれ』と言いました。母は最期まで私のことが心配だったようです」

そして追い討ちをかけるように、その年のうちに家業の設計事務所も倒産。しかし、それでも泉屋の空手に賭ける情熱は変わることはなかった。もう彼には空手しか残されてなかったのだ。

協会の研修生試験に臨んだ泉屋だったが、組手では同期の椎名勝利氏に「掛かっていったら、受け身も取れないぐらいにひっくり返された」という始末。また、面接では面接官の先生の名前を知らずに答えられないという大失態。泉屋は「落ちたら落ちたでしょうがない」と半ばあきらめていた。しかし、なぜか彼の元に合格通知が届く。

ケガとの闘い

念願かなって協会の一員となった泉屋だったが、研修生時代の彼は暗くどんよりとした日々を送っていた。先輩指導員の圧倒的な強さと強烈な個性の前に自分を見失ってしまったのだ。

「研修生の頃は試合では勝てないし、何をやってもうまくいかないので、六畳一間のアパートにこもって自暴自棄になっていました。それに私には帰る家もありませんでした。稽古もサボりがちになり、某先生から『この出席率はあんまりだ』とクギをさされたこともあります。酒を飲んでは『明日からがんばろう』と思うのですが、朝は二日酔いで起きられないという、どうしようもない悪循環になっていました」

そんな泉屋にとって転機になったのは2ヶ月間のヨーロッパ遠征であった。日本を離れ空手のことだけを考える時間ができ、海外の指導者たちの人間的魅力と技術の高さ、そして彼らに憧れて何百人もの生徒が集まる海外の道場を目のあたりにする。泉屋は自分の夢を

■組手だけでなく、形でも定評のある泉屋氏。今年度開催される第9回松濤杯世界空手道選手権大会のコーチにも任命されている。

もう一度見直し、再び空手に没入するきっかけを掴んで帰国した。そして、その2週間後の全国大会でベスト8に入ると、胸のつかえが取れたように稽古に打ち込みはじめる。しかし、ここで24歳の泉屋をどん底に突き落とす"ある事件"が起こる。まさに、これからという時の出来事だった。

「あれは忘れもしない5月7日のことです。指導員稽古で、田中(昌彦)先生の引っ掛けにきた足が自分の膝に入って…、膝がネジ切れました」

膝の靭帯断裂。このケガによって泉屋の空手人生もネジ切られたかにみえた。少なくとも泉屋以外はそう感じたはずだ。医者でさえ完治して元の3割ぐらいの回復だろうと予測していたのだ。しかし、彼は当時の心境をこのように振り返る。

「僕の場合はつぶしがききませんから、空手を辞めろというのは死ねと言われているようなものです。ですから、何がなんでも治さなければなりませんでした」

泉屋は関東労災病院のスポーツ整形外科に入院すると、手術を受けた直後からリハビリを開始する。

「病院では、Tシャツ短パンのマッチョマンが松葉杖をついてのしのし歩いていて、まるで"アメリカの刑務所"のようでした(笑)。彼らはアマチュアのラグビーやアメフトの選手でしたが、空手のプロであるはずの自分が一番貧弱な体でした。そこで一から筋肉のメカニズムを学び、根本的に自分を変えようと思いました」

腹筋、ベンチプレス、懸垂、片足でのスクワットと片足での自転車。朝から晩まで、与えられたリハビリメニューを黙々と消化していった。すると2ヶ月間で体重が5キロも増え、肉体改造に成功。しかも、ケガをして衰えた筋力は健常な肉体に追いつこうとする特性があるため、ケガをした膝は昔の貧弱な体ではなくパワーアップした肉体の状態に追いつかんとしていた。つまり、泉屋の膝は驚異的に回復しはじめていたのだ。

「その年の稽古納めに道衣を着ることができました。まだ足に装具をつけたままでしたが、道場の隅で稽古に参加することができました。田中先生が『(稽古に参加しても)いいのか?』とおっしゃったので、『はい』と答えると『ニヤッ』と笑ってくれました。うれしかったです(笑)」

10年目の快挙

しかし、本当の闘いはこれからであった。膝をケガしてから完全に稽古に復帰するまでに、泉屋はじつに2年間という歳月を費やしている。

「リハビリ中はカムバックしたい一心でしたから、それほど焦りは感じていませんでした。しかし、膝が治りはじめ

■「試合場は戦場ですから、目が見えなければ片目で、手が使えなければ片手でも闘わなければなりません」と語る泉屋氏。気迫溢れる組手を見せ、数多くのドラマを残した。

■第40回全日本空手道選手権大会で総合優勝を成し遂げる。カムバックから10年、36歳の時であった。

て稽古に復帰するようになると、筋肉のバランスの悪さに戸惑いました。イメージと現実の動きが全く違っていたんです。結局、完全復帰するまでには2年間かかりました。それは僕が26歳のときです」

そして、26歳で復帰した泉屋が全日本チャンピオンになるまでには、さらに10年の歳月を必要とする。

「復帰しても稽古では負けてばかりでした。だいたい20代後半から30代前半にかけてピークを迎えるはずなんですが、僕の場合、ちょうどその時期が最も不遇の時期でした。もちろん不安や焦りはありました。しかし、弱気になってもしょうがありませんから、ひたすら稽古に打ち込みました。誰よりも稽古しているという自負がこの時期の僕の支えになっていました」

また、もう一つ泉屋の支えとなったのは同期の椎名勝利氏の存在であった。

「僕の目標は椎名でした。認めたくないけど、実力では彼のほうが遥かに上です。僕が入院している間に彼は準優勝してましたから。彼に追いついて、追い越してというのが僕のモチベーションになっていました。彼がいるからやってこれたのかもしれません。『この野郎、負けねぇぞ！』という気持ちは今でもありますよ（笑）」

もともと体が小さかった泉屋。指導員稽古では「掛かっては、転がされ」の連続であったが、それでも泉屋は立ち上がって果敢に挑んでいった。そんな彼が浮上のきっかけを掴んだのは33歳の時、今村富雄氏を組手で破った試合のことだった。

「はじめの合図があって、構えると不思議と『勝てる』と感じました。すると、今村先輩の胸の部分がポッカリ空いているように見えるんです。相手の顔や構えはぼやけているのに胸の部分だけ鮮明に見える。僕はそこに吸い込まれるように中段突きを極めました。不思議な感覚でしたが、今村先輩に勝てたことが大きな自信になりました」

その後、ようやく努力が実りはじめ、着実に成績を上げていった泉屋だったが、その間も彼からケガが絶えることはなかった。腰痛、肉離れ、そして瞳孔を傷つけられたこともあった。しかし、満身創痍になりながらも泉屋は闘いに挑んでいく。

「試合場は戦場ですから、目が見えなければ片目で、手が使えなければ片手でも闘わなければなりません。また、どんなに痛くても倒れてはいけません。僕は当てられて反則をもらっても、倒れて時間かせぎすることなく勝負に出ました。それが武道家としての礼だと思っています」

若い世代から見れば、泉屋の闘い方は決して合理的ではないかもしれない。また、彼のこれまでの道のりもそうである。ケガによって、とんでもない"まわり道"をさせられたような印象を受ける。だが、泉屋は堂々と次のように言う。

「膝のケガがなければ、今の僕はありません。あの2年間で精神的にも肉体的にも強くなれました。今ではケガがあってよかったとさえ思っています」

第40回全日本空手道選手権大会で泉屋はついに総合優勝を成し遂げる。カムバックから10年、36歳の時であった。

■第40回全日本空手道選手権大会で総合優勝を成し遂げた泉屋氏をJKA北海道本部が祝った時の一枚。隣は父・泉屋駒雄氏（この翌年没）。

■厳しさの中に優しさを隠しながら、どんな小さな子にも手を抜くことなく教える。

自分を信じて

泉屋は自らの波乱にとんだ空手半生を振り返ると、一つの教訓を導き出してくれた。それは「自分を信じる」ということである。

「『絶対に指導員にはなれない。絶対に治らない。絶対に勝てない』と言われてきましたが、人から何を言われても僕は自分だけを信じてきました。『自分なら絶対にできる。自分はできる奴なんだ』と信じてきたんです。ですから、今日まで途中であきらめずにやってこれたのだと思います」

選手として一線を退いた今、泉屋はこれまでの経験を後進に伝えていく立場にある。現在、道場で生徒とともに汗を流しながら指導する日々を続けている。指導者として、彼が生徒たちに最も伝えたいこととは、一体どんなことなのだろうか？

■現在、三軒茶屋道場に通う子供たち。数々の大会で優秀な成績を残す子供たちばかりだ。後列左から4番目が長男の武尊（タケル）くん。長女の咲月（サツキ）ちゃんも空手を習っている。

「失敗しても簡単にあきらめないでほしいと思います。夢はすぐに叶うものではありませんし、結果もすぐについてくるものではありません。しかし、努力すれば、努力しただけのものは手に入ります。失敗しても、自分を信じて何度でも挑戦してください。努力を積み重ねれば、いつかは成就するはずです。僕だって優勝するまでに何年かかったか(笑)。ですから、僕は昇級審査で落ちた子いたならば、『次はできるから、やってごらんよ』と声をかけてあげるんです。できない子、つまずいている子、ふてくされている子の気持ちはよくわかりますから」

そしてまた、彼の指導は道場の中だけにはとどまらない。

「富名腰義珍翁の空手道二十条の中に、『凡ゆるものを空手化せよ其処に妙味あり』とあります。僕はよく生徒に『空手化してみて下さい』と言っています。道場で稽古していることが社会で役に立たなければなりません。ですから、家庭で、会社で、学校で『空手化してみて下さい』と。生徒に言いながら、実は自分にも言い聞かせていることですが(笑)」

幾多の困難にぶちあたり、どんなにケガに翻弄されようが、自分を信じ続けて頂点を極めた泉屋。彼は今、何を考え、これからどのように生きていくのだろうか？

「昔、武士は主君に命を捧げるために武芸を磨いていました。彼らはいつも"死"について考えていたと思います。彼らの傍らには常に"死"があるわけですから、その日の"生"を無駄にはできません。彼らは一日一日を真剣に生きていたはずです。僕も一武道家として、自分が生きていることを大切に感じながら、一日を精一杯生きていきたいと思います」

泉屋は現在も、自分で決めた目標に向かって、挑戦することをやめようとしない。

■子供の部の後に通う一般部の道場生のみなさん。